

法要のお知らせ

祥月法要（2023年3月5日）（2023年4月2日）

祥月法要とは、祥月命日（故人が往生された月のご命日）をご縁として仏法に遇い、阿弥陀さまの恩徳に報謝する思いでお勤めする法要です。

日時：2023年3月5日（英語：午前11時から）（日本語：午後1時から）

場所：トロント仏教会

※英語法要のみZoom配信をさせていただきます。

ZOOMでの参拝を希望される方は、その旨を<tbc@tbc.on.ca>までお知らせください。寺院事務所からzoom link を送らせていただきます。

故人が祥月でない方もご遠慮なくご参拝下さい。



かんぶつえ

灌仏会（花まつり）

日時：2023年4月16日（日曜日） 午前11時

トロント仏教会では来月16日（第三日曜日）の11時より灌仏会（花まつり）の法要を勤修します。

灌仏会（かんぶつえ）は、お釈迦さまの誕生を祝う仏教行事です。

花まつり（はなまつり）と呼ばれ、親しまれている法要の一つです。

この他にも 降誕会（ごうたんえ）、

仏生会（ぶっしょうえ）、

龍華会（りゅうげえ）などの別名もあります。



仏教でもダーナ（施し）と云って、与えることの教えが説かれています。

そのダーナには、「無財の七施」という思想があります。これは、なんの物質や財をもたずともできる布施行のことです。少し紹介させていただきます。

・和顔施（わげせ）―穏やかな表情で人に接する。

・心施（しんせ）―他者のために心配りをする。

・言辞施（ごんじせ）―言葉を大切に使うて、他者と接する。

・眼施（げんせ）―暖かいまなざし。

・身施（しんせ）―人のために奉仕したりつくしたりする。

・牀座施（しょうざせ）―場所や席や地位をゆずる。

・房舎施（ぼうしゃせ）―雨や風露をしのぐ所を与える。

これらをあわせて無財の七施といいます。電車やバスで席をゆずることも、無財でできるちゃんとした布施行なのです。

また、相手の言葉を静かに聴いたり、なにもしないでそばにただであったり、相手の痛いところに手を触れたり、そのようなこ

とも大変すばらしい行為だと思いません。

私たちは「与える」と聞くと、つい物を与えると考えてしまいます。しかし、重要なのは与える物ではなく、与える行為そのものです。

お釈迦さまは80年という生涯の中で、物をあたえることはありませんでした。教えを私たちに説いてくれたのです。

その教えとは、如来の大慈大悲であり、目に見えて手に触れられるものではありません。

だからこそ、壊れることも失くすこともなく、常にわたしたちのころのよりどころとして、はたらきかけてくれます。

お釈迦さまは、涅槃に至るさいに「自灯明法灯明（自らを抛り所（灯明）とし、法を抛り所（灯明）とし、法を抛り所（灯明）とし、さい」を最後の法話として説かれました。

その法（ダルマ）をこれからもこのころのよりどころとして合掌させていただきます。

トロント仏教会

駐在開教使 大内祐真



釈迦涅槃図（万治元年在銘）

千葉県指定有形文化財（工芸品）

そんなバレンタインデーにちなんで、私が読んでいた本は、エーリッヒ・フロムの「愛するということ」でした。彼は20世紀の社会心理学と哲学の研究者です。彼はこの本の中で、「愛」についての思案を述べていきませんが、生命についても大変興味深い著述をしています。

「人間は誕生と同時に、本能が支配する明確な世界から、不明確で、不安定で開かれた世界へと投げ出される。確かなのは過去についてだけで、将来について確かなことと叫びたら、死ぬということだけだ。(略) 人は自分の意思とはかかわりなく生まれ、自分の意思に反して死んでゆく。愛する人よりも先に死ぬかもしれないし、愛する人のほうが先に死ぬかもしれない。人間は孤立で、自然や社会の力の前では無力だ。(略) 実際、孤立こそがあらゆる不安の源なのだ。」

だからそこ、その孤立による虚無感を埋めるために、人は「愛」を求めめるのです。

そして、その「愛」についての考え方や捉え方は、20世紀後半なって大きく変化したと彼は提唱しています。

例えば、ヴィクトリア朝時代には、愛は結婚へと至ることもありえる自発的な個人体験ではありませんでした。

結婚は、双方の家あるいは仲介人によつてまとめられるものであり、社会的な配慮にもとづいて取り決められるものでした。

そのため、結婚した後ではじめて愛が生まれるのだと考えられていました。しかし、近代では、ロマンチッククラブという概念が西洋社会に広く浸透し、多くの人が結婚に結びつくような個人的体験としての愛を求めるようになったのです。

彼は、このような多くの現代人が愛することよりも愛されることに重点を置くようになってしまったと問題を提唱していました。

なぜこれが問題かという点、自由な愛という概念によつて「自分が愛する」という能力よりも、「自分を愛してくれよう」という対象が重要視されるようになったからです。それは、現代社会における愛というものが、購買欲と好都合な交換という考え方に偏っているということです。

200頁あるこの本は、他にもさまざまなる視点から愛について語られています。彼が伝えたかったものとは、「愛されることよりも、愛することの方が尊く大事

である」であったと思います。

以前、愛についてではありませんが、宗教学習にいられた高校生らに「receivingとgivingの方が尊い」という話をしました。

ワークショップが終わると、ある学生が私の方に近づいてきました。その子は「うちは貧乏だから、人に尽くしたくても何も与えることが出来ない。そんなときは、どうすればいいのだろうか？」と質問をしてくきました。

この問いを聞いたときに、私は自分の説明不足に反省しました。なぜなら、この世界では、与えることはその人が裕福である象徴として見られてしまいます。

しかし、たくさん持っている人が豊かではないのです。たくさん与える人が豊かなのです。ひたすら貯めこみ、何か一つでも失うことを恐れている人は、どんなにたくさんものを所有しているようと、こころの面では、貧しい人になってしまいます。

そして、与えられる人は、与えるモノが物(色形のあるもの)だけではないことを知っています。そのことをエーリッヒ・フロムは、「愛」で答えたのではないのでしょうか。

佛心

二〇二三年三月号

浄土真宗 本願寺派

トロント仏教会

学んでも、心の底からその縁起を受け入れることができず、苦しみもがいてしまいます。

お釈迦さまは、沙羅双樹の間に横たわったとき、弟子たちに最後の法話をしました。

「さあ、修行僧たちよ。お前たちに告げよう。もろもろの事象は過ぎ去るものである。怠ることなく修行を完成なさい」（中村元訳『ブツダ最後の旅』）

また、お釈迦さまの最後の言葉として、よく知られているのは、大般涅槃經に書かれてある「自灯明法灯明（自らを抛り所（灯明）とし、法を抛り所（灯明）としなさい）」だと思えます。

ところで、先月はバレンタインデーでした。

その日は火曜日で、久しぶりに休みが取れたので、朝からダウンタウンまで出かけました。喫茶店で本を読んでいると、隣に座っていたカップルがプレゼントを渡し合っていました。

私たちは誰でも、何かプレゼントや贈り物をいただいたとき嬉しい気持ちになります。だから、クリスマスやサンクスギビングデー、そしてバレンタインデーが人気なのも納得できます。



涅槃會 与えること 受けとること

先月、トロント仏教会で涅槃會の法要が厳修されました。

2500年以上前、お釈迦様がインドで死亡くなりになり、仏教ではそのことを「涅槃」と表します。

涅槃とは、もともとサンスクリット語でニルヴァーナといい、「吹き消す」という意味です。つまり、涅槃に至るとは、煩惱の火が吹き消された状態。すべての束縛から解脱すること。

不生不滅の境地に入ったこと。そこから特に、お釈迦さまの死を指す言葉となりました。

私たちの眼（まなこ）は、煩惱によって真理（縁起）を見ることができませ

生死とは、その苦しみの代表的な一つです。

今は平均寿命も伸びて、多くの人が80歳までは生きられるだろうと感じています。しかし、「老少不定」という言葉があるように、私たちの人生はいつでも何が起こるか分からない、不安定なものです。

また、死んだあとも「去る者は日々に疎し」と言われるように、存在そのものも月日が経つにつれて忘れられていくものです。

このようなことを考えると、こころのよりどころとして手に取って頼れるものは、無いように思えてしまいます。

ですから、お釈迦さまは、私たちは色や形あるものに捉われるのではなく、法（ダルマ）をこころのよりどころとするように説かれました。それを読み取れるのがお釈迦さまの最後の言葉です。